



動きだしたインドのフィンテック②

国際社会経済研究所  
(NECCグループ)主幹研究員

大平 公一郎



々は特にモバイル決済に注目し、利用を開始した。

ワンストップ

インドのモバイル決済サービスは、Paytm、Amazon Pay、さらには通常のオンラインショッピングができる機能も備え、ワンストップでさまざまな生活に必要な決済を



提供している。最近では店舗での支払いに使えるモバイルウォレットの提供に移行しつつある。通信事業者も主に自社の携帯電話加入者に向けてモバイル決済サービスを提供している。インド決済公社

PaytmアプリからQRコードを撮影し決済する(大平氏提供)

のようにキャッシュレス決済の普及に尽力する公的機関もある。

このようにさまざまな主体がモバイルウォレットを中心としたキャッシュレス決済サービスを提供していることがあり、こうした不安定な通信環境の下でも多いPaytmであっても、中国におけるアプリやウィーチャットペイのようにどこでも使える、といった状況には至っていない。

課題解決がカギ

決済では皆が同じ仕

組みを利用することが普及の鍵になるが、多くのサービスが並立することで、利用者・店舗共などの仕組みを使うか迷ってしまう、結果的に現金の利用に戻ってしまう。また大都市圏でもスマートフォンデータの通信がうまくつながらない、切断されるという

課題を解決していくことが重要になりそうだ。(金曜日掲載)

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

本格的に進むためには、こうした多くの課題を解決していくことが重要になりそうだ。

高額紙幣の廃止  
中国でのフィンテックの決済からスマートフォン(金融とITの融合)普及は、日本でもよく報道されているが、中国に次いで人口の多いインドでも、フィンテックの利用が動き始めている。インドのフィンテックで最も変化が大きいのは決済分野であり、現金によ

る決済からスマートフォン(金融とITの融合)普及は、日本でもよく報道されているが、中国に次いで人口の多いインドでも、フィンテックの利用が動き始めている。インドのフィンテックで最も変化が大きいのは決済分野であり、現金によ

る決済からスマートフォン(金融とITの融合)普及は、日本でもよく報道されているが、中国に次いで人口の多いインドでも、フィンテックの利用が動き始めている。インドのフィンテックで最も変化が大きいのは決済分野であり、現金によ

る決済からスマートフォン(金融とITの融合)普及は、日本でもよく報道されているが、中国に次いで人口の多いインドでも、フィンテックの利用が動き始めている。インドのフィンテックで最も変化が大きいのは決済分野であり、現金によ

モバイル決済に移行